

合成制御化学分野

3月11日2時46分からの数分間、今まで体験したことのない激しい揺れが襲い、10 kg 以上ある機器も軽々と揺さぶられ、次々と床に落ちていきました。当研究室では、引火性の有機溶媒を大量に使っているため、慌てて機器類の電源を切り、廊下に出て地震が鎮まるのを待ちました。そろそろ治まってくれるのではないかと、ドアや壁につかまりながら耐えていましたが、治まるどころかますます揺れがひどくなり、ついには停電し蛍光灯やドラフトが止まってしまいました。周囲が急に薄暗くなり有機溶媒のにおいが立ち込め、一層恐怖感が強くなりました。地震の間、皆が、「建物だけは倒壊しないでくれ」と願っていました。5分以上経って、ようやく揺れがいったん治まり教室員全員で非常階段から外に出ました。その後も繰り返し激しい揺れが襲い、外は雪が降り始めました。凍えそうな寒さの中、出火してこれ以上事態が悪化しないのを祈りながら、外から研究室の様子を見守りました。幸い火は出ませんでしたので、揺れがある程度落ち着いた数時間後に研究室に戻り、財布や家のカギなど必要なものだけ持ちだして帰宅しました。

数日後、研究室の中を見回すと、その廃墟のような様子に愕然としました。床には割れたガラス器具や試薬瓶が散乱し、機器類が移動したり倒れたりして通路をふさいでいる状況でした。始めは、電気もなく、食料の確保も難しい状況でしたが、昼間の明るい時間にスタッフ4人で細々と片付けを始めました。ガソリンもない状況でしたので、自宅から1時間近くかけて自転車や徒歩で研究室に集合して片付けをし、暗くなる前に再び1時間近くかけて帰宅するという生活でした。数日後に電気、水道が復旧し、徐々に状況が改善されてくるに従い、研究再開を強く願う学生たちが一人また一人と戻って片付けに加わってくれました。人手が増えると片付けは一気に進み、三月末には、ほぼ完了しました。そこに襲ったのが4月7日の震度6強の余震でした。再び研究室の中を乱され、本震に耐えたガラス器具類や機器類がさらに破損してしまいました。一度片付けたものがまた元に戻ってしまったという喪失感とこのような大きな余震が再びやってくるかもしれないという恐怖感に、くじけそうになりながらも皆何とか自分を奮い立たせ片付けを続けました。4月末には、ほぼ研究室の中が整い、研究を再スタートすることができました。スタート直後は、これまで愛情をこめて使ってきた器具や苦勞して合成したサンプル類を失ってしまった悔しさと研究が再開できる喜びが入り混じった複雑な思いでしたが、徐々に研究が軌道に乗り始め日常を取り戻していきました。



震災直後の様子

現在、災害に強い研究室づくりを心掛け、研究室環境の見直しを行っています。第一弾として、地震で転倒してしまった乾燥機の固定、据え付け書棚の導入を行いました。今後も研究室内の機器類の地震対策を進めていきたいと考えています。



現在の研究室（6月）

地震直後から研究室のOB・OGを始め多くの卒業生の方々から、温かい励ましや心配のメールをいただきありがとうございました。また、卒業生の皆様からの温かい支援、誠にありがとうございました。卒業生に支えられていることを改めて実感したことが復興への大きな力となりました。これから、良い研究をし、良い人材を育成することが、皆様への恩返しだと思っております。

文責 澁谷正俊